

第8回大和川流域委員会 議事録

開催日時：平成17年10月14日(金)15:00～18:00

場所：大阪厚生年金会館 ウェルシティ大阪7階（フロールAB）

委員出席数：出席12名、欠席5名（沖村委員、荻野委員、加我委員、千田委員、中川委員）

1. 決定事項

- (1) 意見集約（整理）は、「特徴・歴史」、「空間利用」、「環境」、「利水」、「治水」、「環境教育・住民啓発」の6テーマで整理することで了承された。
- (2) 委員へのアンケート結果による視察ポイント、および流域委員会で議論の対象となった箇所を盛り込んだ庶務からの視察ルート案で了承された。

2. 議事経緯

(1) 第7回大和川流域委員会審議報告

第7回大和川流域委員会審議報告がなされた。

(2) 委員からの情報提供「治水」、「教育・啓発」

(a) 黒田委員：「大和川クリーンキャンペーンにみる子どもたちの認識の変化について」

「子供が変われば親が変わり、親が変われば地域が変わる。」という合い言葉で、「大和川クリーンキャンペーン」の活動の一環として、20年前より絵と作文、写真、ポスター等の募集を行っている。当初の作文や絵の募集から、5年目のテーマソング「大和川」、10周年の親・大人への関心を引き出した写真・テーマソング「大和川慕情」、子供水環境サミット開催、15年目の副読本づくりなど概ね5年ごとの節目に変化がある。その間に大和川についての子供たちの意識は、利便さ故に自然環境を破壊する人間の不信から、親が子供と共に河川の清掃活動に参加するようになって希望がわき、写真の叙情あふれる大和川の風景に接して愛惜の情が広まり、大和川を好きになっていく変化を絵・ポスター・作文・写真の作品のスライドにて紹介。子供達と自然の関係、地球規模での環境問題への関わり方、大和川クリーンキャンペーンの合い言葉「流れは未来に続く」を紹介。

(b) 仲川委員「大和川流域の治水について」

大和川は東から西へ流下しているのに対し、台風や豪雨はどちらかと言うと西南方向から移動するので、下流側で洪水が重なることはあまりないのではないかと。圏域分割別に浸水被害を鑑みて、2日間雨量291mmと138mmでの比較、時間雨量88mmと47mmでの比較による被害状況整理、内水氾濫、流域の現状などから考えた、治水計画についての私案、及びスーパー堤防の推進、亀の瀬狭窄部対策、総合治水対策などの必要性について説明。

(3) 質問に対する回答など

河川管理者から「質問に対する回答など」についての説明がなされた。

(4) 大和川の「治水」について意見交換

主な意見及び補足説明は以下のとおり。

(a) 空間利用

- 10月に大和川を体験させたいという熱心な先生と一緒に浅香へ行き、魚がぴちぴち跳ねていて、参加した子供たちも大人もすごく喜んで、大和川がよみがえってきているという実感を持った。川と遊ぶということ、住民と一緒に真剣に追求しながら川を見守り、遊べる川辺を点から線に、線から面にしていくということの本気で考えないといけないと思う。

(b) 利水と環境

- 委員からの説明では、大和川流域の河川環境を保全するために、不足している水を他水系に依存せざるを得ないとあるが、現実問題としてどのくらい可能性があると考えるか。
- 他水系への依存は、現在、県営水道で50.4%（平成15年度）、農業用水では60.5%（平成16年度）と聞いているが、支川の上流から少しずつでも水が絶えず流れるよう、冬場における他河川からの分水をお願いしたい。
- 田原本、大和郡山、生駒市域などでは、地下水が豊富であるということを聞いている。利水という点では、奈良盆地部における地下水の上手な利用の仕方というのを考えておくべきではないか。
- 奈良県内における地下水利用について、なにか資料はあるか。
 - 第5回流域委員会で提供したデータでは、上水道では大和川の表流水より地下水の方が多く使われている。また工業用水では地下水に頼っているところが多いようである。
 - 斑鳩町では、川から取水するための堰を治水上の問題から撤去したため、近くで代替として井戸を掘って地下水を利用していた。最近是他で地下水の利用も多く、地下水が取りにくくなったとか、地下水の涵養能力が下がっているということを聞いている。そういう意味でも、奈良県や大阪府の協力を得ながら、地下水のデータを揃えていかなければならないと考える。
- 10年ほど前、大和郡山の確か蟹川という川だったと思うが、井戸でくみ上げた地下水を川に流すことで川がきれいになり、その周りを公園化し、藻を住民が刈り取るなど、住民の協力を得て、水量が増えるとともに、非常に水がきれいになってきたということを見学した。

(c) 治水

- 川というものは洪水があれば氾濫するものだから、自然は良いものだけど怖い面も持っているということについて、自分も含め日本人全体が最近鈍感になってきていると感じる。ハザードマップ的なものや住民への情報提供など、防災に関してソフト的な面で、日常的に活動されている委員の考えを知りたい。
- 台風の時などの初期段階では、サイレンや鐘を鳴らして住民を呼び集めて土のう積みをするなど、とりあえず自分のところは自分で守るという初期防災をやらなければならない。若い人を集めたいが、大阪へ勤めている人も多く、洪水が平日の昼間に来たらお手上げということになる。ハザードマップは市で作っており、歩いていける周囲の2、3箇所に避難することになっている。
- ハザードマップまで流域委員会で議論するかは少し疑問であるが、治水において、ソフトとハードの組み合わせというのは大事だと思う。
- 工事实施基本計画の柏原上流域の2日雨量確率図では250mmを超えたプロットがないが、統計期間を近年までとした雨量確率計算結果の図には250mmを超えたプロットが3点ほど現れている。これは、昭和47年以降に250mmを超えたイベントを3つも経験したという見方をしているのか。
 - 柏原上流域の250mmを超えた雨は、昭和57年の291mm、明治36年の266.7mm、大正6年の266.4mmの3つである。昭和47年以降に大きい雨が集中しているということではない。
- 統計期間を近年までとした雨量確率計算結果から見ると、雨量の評価が少し小さくなるグンベル分布での評価を現在の計画の基本としているが、そのことに問題はないのか。
 - もう少し大きな雨量を対象にすべきではないか、雨量の見直しをすべき時期ではないか、という議論はあると考える。いろいろな手法をとっても200年確率の雨量としては工事实施基

本計画の280mmぐらいは出そうだという事を今日は説明した。

- 高取川では時間雨量47mmで氾濫をしたということだが、本川との関係ではどのように理解すれば良いか。支川との関係を考えないと、本川の事は考えられない。
 - 時間雨量100mm前後の場合には堤防が決壊するおそれがあるが、時間雨量50mm前後であれば何とか堤防は持ちこたえるのではないかと考えた。
 - 亀の瀬の河床が隆起しているというデータから、ある程度工事が完成した時点で亀の瀬の河床を下げることは必要と考えられるか。また、1982年の水害の後、亀の瀬の狭窄部に地下トンネルを造って流すことを検討されている。その時の検討の資料があれば提示していただきたい。
 - 大和川の特徴として中流域の狭窄部の疎通能力を高めることは非常に大事だと考えている。河道をどこまで広げるかについては、上流への効果、下流への影響とその対策、コストと工期などを技術的に検討し、選択肢をしっかりと用意することを考えている。
 - クリーンキャンペーンでは取りきれない危険なゴミの除去や土砂の堆積、亀の瀬の地すべりによる河床の隆起の問題も含めて川底の対策をとらないと、治水の上でも十分に安全な川づくりということができないと思うので、この問題についてぜひ議論していただきたい。
- (5) 第1回～第7回の委員会の意見集約例について
- 意見集約（整理）例をどのように委員会の意見としてまとめていくかについて意見を頂きたい。事前の委員からのアイデア及び意見では、「テーマ区分の項目に『環境教育・住民啓発』を加えて頂きたい。」「上流、中流、下流というような区切りを入れればどうか。」というご提案があった。
 - 意見集約について意見の整理の仕方と委員会の進め方とは密接に関係しており、意見の整理方法だけで議論できるというわけにはいかないと思う。そういう意味では、ワーキンググループをつくって議論する形をとれば良いのではないかと思う。
 - それぞれ持ち場のジャンルが違う人間が、みんなの意見を聞きながら考えてきたというプロセスは非常によかったのではないかと思う。全員でそれぞれのカテゴリーごとに討議していくのが良いのではないかと思っている。委員全員がお互いどういう意見を持っているのか、それを知ることを続けていくことが大事だと思う。
 - 河川管理者の方が原案を出して、その当否について流域委員会は検討すると理解していた。集約するという事は、原案をつくるに当たってある一定の施策的なものの集約点を河川管理者に示すことになるのか。集約は河川事務所がやるのではないかなと思っていた。
 - 河川整備計画の原案の「たたき台」を河川管理者が出し、我々がそれについていろいろ意見を言うというのが基本的なスタンスと考えている。我々の意見を参考にされて、あるいは取り入れるべきものを取り入れて、河川管理者が原案をまとめていかれるというプロセスを想定している。たたき台が出た時に、我々がこれまで議論してきたことをばらばらに持っていたのでは、なかなか意見を的確に言えるかどうか疑問である。流域委員会としては、それを計る物差しを持っているべきであり、それをまとめておく必要があるのではないかという意味での意見集約である。
 - 皆さんの意見を聞くことは良かったと思っている。河川管理者のほうから出てきたものに、意見を述べさせてもらって、完成させていくのが一番良いと思う。
 - それぞれの専門分野でのワーキンググループとしてまとめるということよりも、時間はかかるが、専門外のこともみんなで従来やってきた方法でまとめる方向のほうが良いという印象

を持っている。

○集約というと1つのものに絞ってしまうというイメージなのかもしれないが、そうではなくて、いろいろな意見の併記でも良いと思う。この「委員会の意見集約(整理)例」のようなものだけでは、今後いろいろ我々としても扱いに困るのではないかという気がするので、少し整理が必要ではないか。第9回までの間に、「委員会の意見集約(整理)例」の中で追加すべき点や訂正すべき点など庶務の方へご意見をお寄せいただいて、第9回には大体こういう具合に整理できるのではないかというものにしたい。

○河川管理者が委員に対して何を求めているのか、また委員としてそれに対して意見集約がどの範囲まで可能なのかお聞きしたい。委員会の進め方としては、細かく分けてやるべきではないと思う。

○最初から河川整備計画の案を出して議論するのではなくて、これまでいろいろな立場の違う方々から良い意見が寄せられていると思っている。頂いた意見も反映させながら、今後、整備計画のたたき台を示したい。整理した意見をもう一度確認して頂き、足りないところ、修正する所を指摘していただければ十分である。

○委員会の意見の整理カテゴリーとしては、「特徴・歴史」、「空間利用」、「環境」、「利水」、「治水」に「環境教育・住民啓発」を加える。

○Cプロジェクトの作成に当たっては、一定の施策が出てくると思うが、第10回の骨子を出す時点でCプロジェクトが反映されていくのか。大体の構想はいつ出されるのか。

→Cプロジェクト計画は、2010年までに何をやるかという計画であり、20年、30年でやっていく河川整備計画の一部先取りだと認識している。大体の構想は、年度内に固めていきたい。

3. 現地視察会について

委員へのアンケート結果による視察ポイント、および流域委員会で議論の対象となった箇所を盛り込んだ庶務からの視察ルート(案)で了承された。また、現地視察会は11月22日に開催し、11月25日が予備日であることが報告された。

4. その他

第7回流域委員会で委員から要望のあった針葉樹林と広葉樹林の保水力の違いのデータについて、実際調査をされた方に問い合わせた結果として、樹種の違いによる保水力の違いがわかるような調査結果は現時点では得られていないとの報告があった。

第9回流域委員会の日程について、12月中旬開催を目途に、速やかに調整しお知らせすることが報告された。

以上